様式第２号

視察研修先	千葉県松戸市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	子育て施策について（送迎保育ステーション、駅前・駅ナカへの小規模保育施設の整備）		

感想・所見など

＜市の概要＞

松戸市は都心から２０キロ圏に位置し、さらに千葉県の東葛地域（北西部）の一翼に位置している。西は江戸川を境に東京都葛飾区、江戸川区、埼玉県三郷市と接し、南は市川市、東は鎌ヶ谷市、東から北にかけて柏市、流山市と接している。松戸市の歴史は遠く原始時代にさかのぼり、市内諸所の丘陵には幸田・東平賀・上本郷など多数の貝塚が分布し、竪穴住居址も次々と発見されている。ついで古墳時代には河原塚古墳をはじめ多数の古墳が築かれ、ここに有力な士豪勢力が存在したことをうかがうことができる。江戸時代には、松戸市の大部分は天領（幕府直轄領）旗本領となっていた。松戸・小金町は、水戸街道の宿場町として、また、松戸河岸は江戸川水運の要衝として賑わいをみせた。昭和に入り、東京市の急速な発展に影響されて、次第にその衛星都市としての機能をもつようになり、隣接地域との合同強化にせまられ、相次ぐ合併後、昭和１８年４月１日に待望の市政を施行するに至った。昭和１６年からの太平洋戦争時、首都に近いことから通勤者の被災地あるいは、疎開地として人口世帯が徐々に増加していった。３０年になると新京成電鉄が開通し、市域内陸部の交通近代化の実現。３１年の神武景気の直後に爆発的な人口増加のきざしが現れ、都心への通勤時間が４０分程度という地理的条件も相まって、３６年以降は、毎年１万３千人以上の増加を記録した。

＜視察内容＞

子育て施策について（送迎保育ステーション、駅前・駅ナカへの小規模保育施設の整備について視察をいたしましたので報告します。

●松戸市の待機児童対策（平成２７年４月国基準での待機児童４８人）

①小規模保育事業の推進（０～２歳児への対応）

・利便性の高い市内全２３駅の駅ナカまたは駅前に整備

②幼稚園預かり保育事業の拡充（３～５歳児への対応）

・市内36園の幼稚園の空き定員の有効活用（預かり保育実施園は24園）

・預かり保育時間を延長することで就労している保護者の幼稚園進学へのニーズに対応し、さらに幼稚園に対する人件費補助と保護者に対する預かり保育利用料助成を行うことで「時間」及び「金」という幼稚園進学への壁を取り払い、保護者が幼稚園を選択しやすくなった。

③送迎保育ステーション事業の推進

・預かり保育実施幼稚園がバスでステーションとの間を送迎し幼稚園の預かり保育を促進
・ステーションの日中の空き時間で一時預かりを実施（幼稚園の休園日対応）
・市内主要駅周辺に幼稚園型の送迎保育ステーションを開設（R５,10月現在9施設）
※8年連続待機児童ゼロへ（国基準）
＜感想＞
通勤時に電車を利用する保護者の方の利用が多くなったり、小規模保育施設卒園後の送迎保育ステーションを利用した幼稚園への通園が一つの選択肢となったことにより、フルタイムで就労している共働き世帯の利用ニーズも増えているとのことで、松戸市の待機児童対策はすばらしい成果だと思いました。

様式第２号

視察研修先	東京都昭島市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	アキシマエンシス（昭島市教育福祉総合センター）について		

感想・所見など

＜概要＞
昭島市は昭和29年5月、旧昭和町と旧拝島村が合併し、東京都では7番目の市として誕生しました。市の北に玉川上水、南には多摩川が流れ、豊かな水と緑に恵まれたまちで、東京都内で唯一、深層地下水100％のおいしい水道水を飲むことができます。こうした豊かな自然環境と、都心へのアクセスに約1時間という快適な生活環境を併せ持った魅力あるまちです。また、昭和36年に市内の多摩川河川敷で発見されたクジラの化石は、調査・研究が進み、平成30年1月に、コククジラ属の新種のクジラとして認められて「エスクリクティウス　アキシマエンシス（和名：アキシマクジラ）」という学名が付与され、クジラのまちとしても活気のあるまちづくりが展開されています。
＜視察内容＞
アキシマエンシス：平成 28 年 4 月に、つつじが丘南小学校とつつじが丘北小学校と統合し、新たにつつじが丘小学校として発足し、つつじが丘南小学校は閉校となった。アキシマエンシスは、このつつじが丘南小学校の校舎と体育館を活かしつつ、校庭跡に市民図書館や郷土資料室が入る国際交流教養文化棟を新設。「学びの回遊」が出来る場として造られました。
・市民と情報、市民と市民をつなぎ、あきしまの今を未来ににつなぐ場
・市民ひとりひとりの世界が広がり、交流の輪が広がる場
・市民が自ら課題に向き合い、必要とする知識や情報、人とのつながりを見つける場
・あきしまの未来を創る市民を育む場
をコンセプトに、市民図書館、郷土資料室、教育センター、子ども家庭支援センター、男女共同参画センター等が連携した複合施設としてオープンした。
●アキシマエンシス-昭島の「学びの回遊」
アキシマエンシスは昭島市のつながりの拠点となる施設です。様々な施設を一つの小学校の敷地の中に複合し、有機的につなげる。お互いの活動を触発することで、昭島ならではの活動や交流発信ができる、新たな「学び舎」をつくる。この学び舎は、校庭に位置する「知の拠点＝図書館」を核として、「文化の拠点＝体育館」などを連携させ、新たな交流を生み出す。この交流は、市民を育み、新たな出会いを見つけ、昭島の未来をつなぎ、広がる「学びの回遊」となります。さらに、教育施設と児童福祉施設を集約することで、教育と福祉が一体となった継続的な支援が可能となり、同様の立場にある市民が集う機会を創出し新たな交流を生み出す。

＜感想＞
図書館が１階と２階に在り、図書館利便性を高めるため最新の設備が導入されている
●セルフ貸出機・資料検索機・座席予約システム：自分で貸し出し手続きが行えるセルフ貸出機、図書・資料が検索できる資料検索機、さらに学習室や個室の席が予約できる座席予約システムを管内各所に設置している。
●自動化書庫：２０万冊の蔵書規模を誇る自動化書庫は、数分で欲しい図書を呼び出すことができる。
※全国でいろんな図書館を見させてもらったが、すばらしく近代的な、初めて目にする図書館でした。指定管理者制度を導入しており、寒河江市の図書館もこんな風に変わってくれたらいいと思います。

様式第２号

視察研修先	神奈川県大和市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	「おひとりさま支援条例」と高齢のひとり暮らしの方を支援する取組について		

感想・所見など

＜市の概要＞
大和市内の人類の足跡は、約23,000年前の旧石器時代の遺跡で確認されています。鎌倉幕府が開かれると、市域は渋谷庄と呼ばれ渋谷重国が、室町時代には鶴間郷と呼ばれ足利氏が支配した。1590年には徳川家康が関東に入国しました。検地が実施されたり、宗門人別帳の作成などが行われ、近世農村としての基礎固めが行われた。明治22年に町村制が施行され、市域には鶴見村、渋谷村の2つの村ができた。その後、鶴見村では分村問題が発生し、それを収拾するために明治24年、村名を大和村と改称し、ここに「大和」の名称が誕生した。大正15年には、現在の相模鉄道が、昭和4年には小田急江ノ島線が開通。昭和20年終戦を迎え、海軍航空隊は米国海軍厚木基地となった。昭和34年に市制施行。昭和45年には人口が10万人に達した。
＜視察内容＞
●大和市の特徴
〇高い交通利便性
・鉄道駅1km圏における人口カバー率約８０％
（神奈川県内1位・市域のほとんどが15分の徒歩圏）
〇様々な機能がコンパクトに集積、自衛隊・米軍が協同使用する厚木基地も市域に
・市立病院、スポーツセンター、下水処理場、ごみ焼却場、火葬場、河川、大規模緑地、ショッピングセンター
〇緩やかな人口増加が継続、高い人口密度
・神奈川県内で川崎市に次いで2番目、横浜市より高い
〇８０の国と地域の外国人が居住
※コンビニエンスストアのような自治体
●大和市おひとりさま支援条例
近年、長寿化、核家族化といった社会構造の変化等により、一人暮らしの高齢の方が増加しています。「人生100年時代」の到来が現実味を帯びる中、今後もこの状況は続くとみられ、高齢での一人暮らしならではの不安を軽減し、安心して暮らすことのできる社会が必要とされています。年齢を重ねるにつけ、誰しも退職や配偶者との死別等、人生の大きな分岐点が待っています。ひとりぼっちで頼れる人がなく、人間関係を喪失することで段々と社会との関係が希薄になり、出かけることや、人とのコミュニケーションの機会が減少していくことも少なくありません。しかし、人間にとって、

外出や他者との関わりはとても重要です。それぞれが無理のない範囲で外出し、人や社会とのつながりを持ち続けることによって、日々の暮らしがより彩り豊かなものとなり、このことは心身の健康にも関係してきます。一人暮らしであることが、孤立を意味することとならないよう、本人はもちろん、周囲の人や事業者等も共通認識を持って「つながり」を心がけていくことが大切です。そこで大和市では年齢を重ねたことにより他者や社会との関わりを必要とする一人暮らしの市民を「おひとりさま」と称し、おひとりさまが孤立することなく、生涯にわたって生き生きと過ごすことができるよう、それぞれの気持ちに寄り添い、おひとりさま、市民及び事業者等と協力し、様々な面から支援するため、本条例を制定しました。

＜感想＞

大和市さんだけでなく、本市も同じような状況にあり、我々も何か行動しないと、寂しい老後になるのかなと視察を通じて強く感じました。

様式第２号

視察研修先	埼玉県富士見市	氏名	太田　芳彦
視察研修項目	「フレイルチェック事業について」		

感想・所見など

＜視察内容＞

「健康長寿　鍵は”フレイル予防”」

●フレイルとは、年をとって心身の活力（筋力、認知機能、社会とのつながりなど）が低下した状態のことを言います。

多くの人が健康な状態からこのフレイルの段階を経て、要介護状態に陥ると考えられている。

フレイルの兆候を早期に発見し、日常生活を見直すなどの正しい対処を行えば、フレイルの進行を抑制したり、健康な状態に戻すことができる。

フレイルは「虚弱」を意味する英語「frailty]を語源として作られた言葉です。

「フレイル予防を通した高齢住民主体の健康長寿まちづくり」

●東大式「フレイルチェック」の導入

「東京大学高齢社会総合研究機構」がプログラムを開発

「住民による住民のためのフレイル予防」を全国展開

●フレイルチェックの輪が全国で広がっている

令和5年度時点の導入自治体：26都道府県101市区町村で山形県は０

「富士見市フレイル予防事業のスタート」

・東京大学に職員を派遣：2018年～2023年（計2名）

・フレイルサポーター養成：R2年度～R4年度で46名のサポーターが育った

●主な経費

・トレーナー＆サポーター養成研究費・体組成計の測定機材（初年度）：607,778円

・フレイルチェックシート等の消耗品・サポーターポロシャツは毎年度、予算を計上している

「産・学・官・民の連携によるフレイル予防を軸とした健康長寿のまちづくり」

●富士見市が抱える課題

・「高齢者の高齢化」による要介護や認知症の増加

・高齢者独居世帯高齢者のみ世帯の増加

・地域コミュニティの衰退による地域のつながりの低下

・コロナ禍による高齢者の活動量の低下

●富士見市が目指す未来

・高齢者の健康寿命の延伸

・将来的な介護給付費の抑制

・高齢者の生きがいづくり
・フレイル予防産業の創出による地域経済の活性化
「からだチェックcafé」
フレイルチェックをまちの薬局が経営するカフェで実施
●参加者の声
・自分の体の様子が分かってよかったです。
・だんだん年を取ると体力が下がってくるから、定期的に参加したい。
＜感想＞
測定会の1回あたりの参加者数は8～20名程度で公民館、交流センター等での定期的な測定会以外に、町会や地域の体操クラブから測定の依頼があり対応したり、また、独居を含む高齢者世帯の把握や声掛けについては町会長や民生委員が行い、フレイルサポーターの役割についてはチラシ等の媒体を作成し民生委員に配布してもらったり、市内の掲示板に貼ったりするなどの活動などもおこなっており、全市民を巻き込んで事業に取り組んでおり、本市でも導入できないか強く感じてきました。